JCA事務局長兼指導部長
曾雌定理編

サイクリスト手帖

記録からプラニング、年間の走行メモをはじめ、写真記録、コースガイド等、サイクリングの実施に必要な記事ＥＴＣ、も集録した192頁オフセット印刷の高級ビニール装幀サイクリング関係の専門手帖として文字どおり日本ではじめてのものであります。

御註文の方法

◇御送金は振替貯金(東京55566)を御利用になるのが安全で正確でございます。
◇サイクル時報社でも発売しております。
◇五部迄の御註文には必ず送料御加算の上、御送金くださいますようお願い致します。六部以上の場合は当方負担とさせていただきます。

¥ 150 (〒16)

峠　書　店
東京都世田谷区世田谷1ノ154
振替　東京 55566 番

長津田までの間この街道唯一の商店のある荏田

れも電線が邪魔する。えらい苦労をして湯浅君がわれわれを配して一枚ものにしたのは昨年の十一月だつた。

何でもない道すじでも想い出は残るものである。

竹の下も四辻である。だだつ広い十字路に煙草屋の店先にベンチが置いてある。そして煙草屋の店先にベンチが置いてある。バスを待つ人に供してあるのだ。これを夜中、充分道を承知している筈の二人が何としたことか、川和で曲りそこなつて佐江戸へ出ずに一時間前に通つた竹の下へ再び出てしまつたことがある。まあ二人でよかつたと思つているがベンチに腰を下して夜の夜中にパンを噛り、どこかに井戸がないかと、うろうろしていたという想い出も、この竹ノ下という間の抜けた四辻にはうつてつけの想い出である。随分がつちりしているようでもヘマをやつて我ながら呆れることもあるものだ。

鶴見川が四ツ辻の先に、ほつそりと、それも草におおわれて流れている。

竹ノ下からもう一度上ろう。地図にみると六七米から七六米へと、思田へ出るぎりぎりまで登つていく。鶴見川を渡つて登りはじめる頃左手の風景は小さいながらよいと思う。市ケ尾の方まで鶴見川のほとりの狭い田が下の方に置き去りにされていく。いかにも登つていく感じがするのだ。そしてこの道は、おやと思う所で左右に谷があつたりする。尾根を走るに似ているといえば大げさかも知れないが、路傍の草むらを境に、ドンと落ちている谷をみると、私はこれも大山街道の一つの表情だと思う。そうかと思うと右手に崖があつたりする。

坂を大きくカーブして下ると恩田の十字路である。この道は四方全部一時停止の交通指導標が立つている。それはここが坂の中途だからであろう。それだけに前方の眺めは、今までのダウンヒルと異つて滅法明るい。横浜線の高い土堤は濃い緑にもえていて、そこまで白い道が真直にのびている。ここは、季節は梅雨明けどきがいい。雲もようやく高く、そして熱つぽく輝いて山狭の田をもえたたせる。蛙の声が田に湿つてケロケロと大きく響く。

春もうらうらとした薄曇りの日はとりわけいい。そんなときは恩田川をはさんで延びる田のほとりをいきたい。小机の方へ下つてもいいし、鶴川の方へいつてもいい。菜の花が咲き、ネギ坊生が白くほのぼのと愛嬌をふりまき、えんどうの花があいらしい。こんな風景の中を老若男女、子供を交えて走つたことがある。

道端で見ていた人が一家総出だと、羨しげに見送つてくれた。

村山あたりだと、これは四〇〇円の自転車だと子供にきめつけられてガツカリしたという話を聞いたが、この辺ではそんな憂目にあうことがない。

晴れた日に、それも晩秋がいい。厚木に向つてこの道を走つて来たものは、きつと印象深い眺めに接するであろう。丹沢と富士がいろいろと山容を変えるからである。図田まで走つてくる間に、すでに何回か丹沢を見、富士をみてくる筈だが、道はところどころで方角を変え、そして何辺も丘陵の上に出る。その度に見る山の姿が変つていることに嬉しくなるだろう。若い人たちと来たときも、この眺めを楽しめた。長津田を過ぎて、辻に出る手前では、丹沢がうんと大きくなつて、富士山がその上に遠慮しがちに、ちよこんと頭をのぞかせていた。

「おい見ろよ、富士があんなに――」

そんな時ポケツトへ自然に手が入り、煙草を掴み出すだろう。一服喫つた時の気分は、青梅街道や甲州街道のものではない。

菅沼達太郎氏は五月号の「古い話」で曰く

「英国やフランスでは自動車に追突される事故が多いそうですなあ……」

まだこういう言葉も通用しそうだ。なにしろ自動車の量は極めて少いからだ。

だが、この静けさも鶴間で終る。あとは行政道路の中に飲み込まれてしまつたからだ。

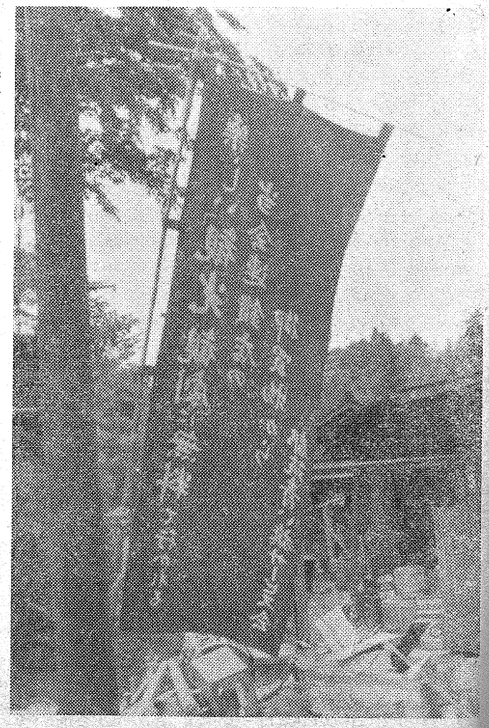
都筑の丘陵を過ぎてしまうと格別な魅力がなくなつてしまうのは、どうしようもない。もう一度都筑丘陵に後戻りさせてもらいたい。そこにはまだふれてない表情があるからだ。

この道中、上鶴間までの間には鋪装路は二カ所、それもほんの僅の間にしかない。一つは横浜線の駅のある長津田の町中である。ここは商店も並んでいるし、ともかく道中唯一の町らしい町であるから当然である。もう一つは、こんな所にと思う所に二、三百米ある。それは馬絹の坂の上の、宮前（みやさき）小学校の前である。同じような鋪装の仕方は、隣の中原街道の大棚にも、また荏田の横の山内にもみられるが、察するに、せめて学校にだけは埃を浴びせたくないという人の世の親心のあらわれではないかと思う。それほどに埃に悩む日が多いのだ。もし、大山街道の沿道の桁根でも木でもいい。緑したたる桁根や木をみられればそれは雨上りだけである。お互に貧しい国に生れたとはいえ、私達の住む所との違いの大きさに胸を痛めずにはいられない。大山街道はこんな所では、きわめて貧しい表情をする。やはり取残された街道である。

取残されたという言葉を大山街道に当てはめれば、荏田の真福寺を想い出す。この近辺に三つしかない重要文化財指定の仏像のある寺である。

歴史散歩ではないが、一寸真福寺に立寄ろう。荏田の十字路から鋪装路に入る。早淵川の橋を渡るとすぐ小さな自転車屋がある。その横を左に入れば、木立の中に真福寺がある。ひつそりとした寺だ。入口に横浜市教育委員会が昭和二十七年に立てた案内板をみると大要次の通りに書いてある。

養良山真福寺は新義真言宗豊山流に属しているが、残念乍ら寺伝を失い開基、開山とも不明である。僅かに求めるとすれば新篇武蔵風土記稿に「墓所に法印定誉という僧の碑ありて天和二年寂せしよしを刻せり、これ開山なるもしるべからず、本尊薬師、座像にして長一尺四寸云々」とあるが、現在の本尊は六臂の千手観音立像で薬師ではない。別にも釈迦堂にあつたと伝えられる釈迦の立像を安置している。この像は所謂嵯峨清涼寺式又は三国伝来の釈迦と称するもので全国に数十軀、神奈川県下に四軀、横浜市内では金沢の称石寺にあるという。なお釈迦如来の立像が重要文化財に指定されたのは昭和二十五年で、それより古く昭和八年に国宝に指定されていた。作は藤原時代末期らしい。

あまりにも印象的に私は大山街道を書いたが、走ることの好きな人にとつてはこういう印象的な道は愛されるべきだと思うので、あえて何のとりとめもない道を書いたわけである。古事に興味のある人には埋もれたいろいろな面白いことがこの道すじにあるようだが、それは私の出来ることではないので、誰か興味のある方にゆずりたい。

筑都の名を残している風景